地域の活動から学ぶ

国内事例 in Japan **2**

自分たちが望む健全な暮らしは、自分たちでつくる~それぞれの市民がポテンシャルを 発揮できるまちづくり~/埼玉県 草加市



そうかリノベーションまちづくり全体イメージ図

アクセスの良さから、東京のベッドタウンとして繁栄してきた草加市。しかし、平日は東京で仕事、休日は郊外のショッピングモールで買い物という状況。言葉の通り「寝に帰るだけのまち」になってしまっていた。

そこで、遊休化している公共施設の空間を活用して、草加に住む人たちのコミュニティづくり、地域課題の同時解決につながる都市型産業を創出し、ほしい暮らしを自分たちでつくることができないかと、市民との対話から考えた。そして、平成27年に始まったのが「そうかリノベーションまちづくり」だった。

現在では、個人版の「リノベーションスクール」をはじめ、ひとまわりスケールの小さい「月3万円ビジネス」や、マーケットの実践者や消費者の学びの場としての「マーケットの学校」、企業を対象とした「企業版リノベーションスクール」が相互

に連動し合い、約25万人の市民が 地域に関わるための入口を多様化す べく、地域と連携しながら取組が進 められている。

草加市における くらしの課題

人口約25万人の草加市。平成27年の調査によれば、日中市内で仕事をする人たちは、全体の約3割。小学生のいる子育て家族の約4割の人たちは市外で服を選び、約3割の人たちは、市外で飲食を楽しむ。家族での買い物にいたっては、約6割の人たちが市外に行くという。

市内でお金が循環しないという地域の課題に対し、地域密着型ビジネスの担い手を育てることで、域内経済循環を加速させ、「ほしい暮らしは自分たちでつくる」地域の実現を目指した。

地域密着型ビジネス担い 手づくり「リノベーション スクール |

平成27年に、まず始めたのが個人版の「リノベーションスクール」。 草加市内にある遊休化している官民 の空間を活用し、地域課題を同時解 決するようなビジネス創出を目指す。

ビジネスを始めたいリノベーションスクール参加者は、自ら15,000円を支払いこのスクールに参加する。スクールは、プレスクールを含めて4日間で完結する。

まず初めにまちを歩き、地域の人の話しを聞いたり、地域資源を発掘したりする。その後、参加者が6名程度のグループに分かれ、公共施設の空間をどう活用し、地域課題の解決につなげていくか、事業計画を考える。計画づくりの合間には、まちに変化を与えるような事業をすでに展開している、草加市内外の講師レクチャーも組み込まれている。

最終日には、YouTubeの公開配信がされている場でオーナーの方々へ事業計画をプレゼンし、4日間が



「リノベーションスクール」4日目のプレゼンの様子

終わる。そこからは、事業計画者が 本格的に事業を始めていくこととな る。

実際にリノベーションスクールで人と人とのつながりが生まれ、事業化されたコンテンツは、波及案件を含めて令和5年11月現在で全28事業。中には、野菜料理を楽しめるバル「スバル」が、草加のカフェなどで出るコーヒーかすを肥料としてオーガニック野菜づくりをしている農家「chavipelto(チャヴィペルト)」と連携し、食材のやりとりだけでなく、ワークシェアまでする事業がある。

消費者側にとっては、野菜づくりをしている農家さんの話しを聞きながら、スバルでおいしい野菜を食べることができる。chavipeltoにとっては、消費者の声を聞きながら野菜づくりを進められる。お互い顔の見える関係の中で、それぞれの価値観や物語を共有しながら経済循環が生み出されている。

また、域内経済循環を生み出す始 点としてのビジネスだけが生み出さ れているわけではなく、事業運営を 支える側の民間自立型まちづくり会 社「家守会社」も、リノベーションス クールを通じて同時に誕生している。

このように、地域に対して思いをもった人と人をつなぎ合わせ、地域課題の同時解決に資するビジネスの創出をサポートするとともに、ビジネスを続けていくためのサポーターも同時に創出し、「顔の見える経済循環」のハブをつくっていくことを公民連携のまちづくりと位置づけ、現在も取組が進められている。

現状による制限を越え、 健全な暮らしを実現する きっかけづくり

「リノベーションスクール」の取組

を進めるにあたり、見えてきたのは 地域で暮らす母親たちの思い。

例えば、社会に出て働きたいけれ ど、子育てとの両立を考えたとき、 子どもを預けてまで働くことに躊躇 する母親たちがいた。

そこで、一回りスケールの小さい商いを始めるサポートとして「私たちの月3万円ビジネス(3ビズ)」を始めた。「月に3万円」というスケールであれば、子育ての合間でもできることがある。

そこから発展し、「3ビズ」で知り合った母親が「リノベーションスクール」に参加し、子連れでも働ける「シェアアトリエ つなぐば」を創業した。「シェアアトリエ つなぐば」は、子どもを預けて仕事をする、もしくは子どもは預けたくないから仕事はしない、という二者択一ではなく、子どもと一緒に働くという働き方を地域でつくっていく拠点だ。

現在、「つなぐば」では、子育てをする外国籍の方も含めた数十名の母親が、日替わりでシェアキッチンを借り、ランチやスイーツを提供している。

核家族化や両親共働きの家庭が増えた今、子育てをすることになれば、大人側が多くの部分で制限を強いられる現実はある。一方で、子育て世代がつながり合い、自分たちのやりたいことと子育てをいかに両立させるか考え、実現していくための場が草加市にはある。

自分のやりたいことが制限される 生活を、いかに我慢するかではなく、 いかにつくり変えていけるかを考え る。一人では難しくとも、地域の人 たちと一緒になって考える場があれ ば、つくり変えられる可能性は高 まっていくのではないだろうか。



シェアアトリエ つなぐばの様子

「そうかリノベーションまちづくり」 の取組は、そんな地域での健全な暮らしを自分たちで実現する、自治の サポートシステムともいえるのかも しれない。

「そうかリノベーション まちづくり」を支える 自治体の体制づくり

平成27年にはじまった「そうかリノベーションまちづくり」はさまざまな発展を遂げ、各地で健全な暮らしが広がりつつある。これだけの長い期間、1つの事業を柱に地域を支え続けるには、自治体組織の体制整備が欠かせない。

特に、事業の推進体制として、全 国で初めて事業の専門部署を設置し、 現在4名のスタッフが専従している。 4名体制であれば、そのうちの数名 が異動したとしても、地域とのつな がりが途絶えることもない。

また、ここでの経験が異動先につながり、福祉分野から考える健全な暮らしづくりに活かすような動きも、自治体内部に出てきている。

自治体の内部体制を整備し、地域 とのつながりの中で得た知見が積み 重なる仕組みをつくる。そのことが、 中長期的に事業が続くことを支え、 さらに地域のくらしを、少しずつ健全 なものに変えていくのかもしれない。